

碁源——天授の盤上遊戯・人智競技 (3)

夏 剛 ・ 夏 冰

前記

本稿連載第2回(本誌前号)中の中国・台湾出身の九段棋士は、世界初の実力制九段の誕生(藤沢庫之助, 1949.6.15)以降の70年間を区切りに、呉清源(50.2.15)～楊鼎新(第23回LG杯優勝[2019.2.14])に由り特進)の63人とした。今回は呉を軸と為す故その後の70年間に変更し、19年9月15日に昇進した台湾の林書陽等を追加する。

由って前回の第2部分の第81段落(113頁第19～23行)、最後の第99段落(116頁第10～14行)は、次の様に微修正する。

名前に「銘」を共有する3兄弟の妹^{いもうと しゅくきょう}鄭淑卿(1966～)は応昌期囲棋教育基金会(83年設立)勤務で、2007年に一品(九段)第1号(98)で同年世界戦優勝者周俊勳(1980～)と結婚した。台湾の棋士段位制度は大陸より早い1979年に発足したが、九段の誕生は16年遅く総数も13%に当る。周と翌年の陳詩淵(1985～)に続いて2002・14・16・19年に、林至涵^{かん}(1980～)・蕭正浩(1988～)・王元均(1996～)・林書陽(1989～)が成った。

日本治下の^ば傳播や国民党政権の強化が無ければ、台湾は2番目に大きい島の海南と同じ囲碁後進の儘であろう。大陸を先んじた最東部「先富」地域の在籍・在日棋士を含む中国出身者の九段は、上海11、台湾(在日)・河南各7、台湾(域内)6、広東5、浙江4、北京3、四川・江蘇・黒龍江・山西・遼寧・湖北各2、福建・湖南・重慶・雲南・山東・陝西・貴州・江西・吉林各1に為るが、東亜「金三角」の視座から見直せば新しい発見が有る。

現代中国の「緯度軸に生れ、^{エリート}経度軸で動く」歴史と選良集中の地縁・「史縁」

台湾海峡兩岸出身の九段は最初の呉清源から2020年前半まで64人に上り、70年間の平均年0.9人の^{ロー・ベース}低速度は「含金量」の高さの証と言える。上海・浙江・福建・広東・台湾の

合計 34 人 (53.1%) は、東亜「金三角」内 1 級行政区の**囲碁強勢の素地・実績**を現している。「金三角」は韓国の全部と日本の**可也**多くの九段出身地をも含めるから、**囲碁強盛国・地域**の極東（中国語の「遠東」は英語の Far East の直訳）に於ける**1 極集中**は鮮明である。

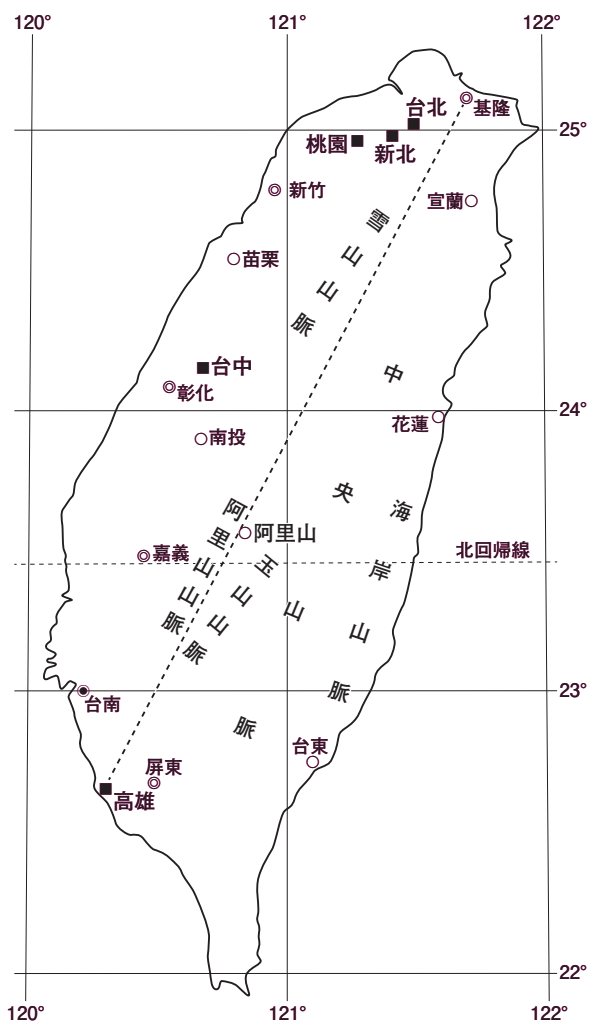
在日を含む台湾出身の九段陣の出身地は、台北市（北緯 25°05′・東経 121°33′）が最多（王銘琬・楊嘉源・張栩・林至涵・陳詩淵・黃翊祖・王元均 [年齢順]）、（以下昇段順）王立誠の**南投市**（23°55′・120°41′）、鄭銘瑄の**台南市**（22°59′・120°11′）、周俊勳の**嘉義県**（23°29′・120°38′）、林書陽の**台中市**（24°09′・120°40′）が有る。

未詳の黄孟正・蕭正浩を除く 5 地域は台北—台南結ぶ線の上か少し西寄りの処に在り、北～西南の海岸との距離は 0（台南）～30*_口（南投）と近い。

貨物取扱量が域内 1・2 位と為る台湾の貿易港は、西南端の高雄（北緯 22°38′・東経 120°16′）と西北端の基隆（25°08′・121°44′）である。地図上の直線で両市を結ぶと細長い島は二分されるが、東側には中国の 3 級行政区の県級市に当る非主要都市しか無く、西側には同 2 級行政区の省都・省轄市・地区級都市に当る 8 つも有り（北から基隆・台北・桃園・新竹・台中・嘉義・台南・高雄市）、東亜「金三角」に入る西部沿岸地域は「表台湾」と名付けられよう。

大陸から敗退した国民党政権は台湾で世界最長の戒嚴令（1949.5.20～87.7.15）を実施し、英国治下の香港を除く東亜「4 小龍・4 小虎」共通の開発独裁を推し進めた結果、共産党政権の朝鮮戦争（50.6.25～53.7.27）参戦（50.10.19 出兵）の

図 4 「表台湾/裏台湾」の概念図。台湾の主要都市・県庁所在地と一部の囲碁棋士の出身地（後出の謝依旻の苗栗市等）を表示する。■●◎○は人口 100 万以上 / 50 万～99 万 / 15 万～49 万 / 15 万未満の都市の記号。



消耗, 「大躍進」の破綻, 「文革」の内乱に由る対岸の積年の疲弊を傍目に, 早くも1人当り域内総生産の1万ドル超(92年達成)等で先進国・地域に伍し, 「東亜の奇跡」の表徴と為る「金三角」の重要な一部を成した。

中華民国は第2次世界大戦(1939.9.1~45.9.2)後の5大国の一員として, 米国・ソ連・英国・フランスと共に国際連合を創始し(45.10.24)安全保障理事会常任理事国と成ったが, 71年10月25日の国連総会決議に由り議席は中華人民共和国に取って代えられ, 日本・米国に強いられた国交断絶(72・79)の追い打ちで孤立が深まる一方である。五輪の参加も1984年から「中華台北」名義と為り, 台湾人は親台感情の強い日本でも「無国籍」扱いにされる。

にも関わらず日本の国民栄誉賞第1号(1977.9.5)は台湾籍の王貞治(1940~)に授けられ, 国民に愛される非同胞への最高表彰は後に1件も無い。祖籍が浙江麗水市青田県(北緯28°12'・東経120°03')で東京生れの彼は, 専門野球の讀賣巨人軍球団(1934年創設)の主力として名を馳せ, 公式戦期間中通算本塁打756本(77.9.3達成)の世界新記録で列島を沸かせ(現役引退前の80年10月12日に868本まで伸ばした), 日本と台湾海峡兩岸が共に誇る存在と為った。

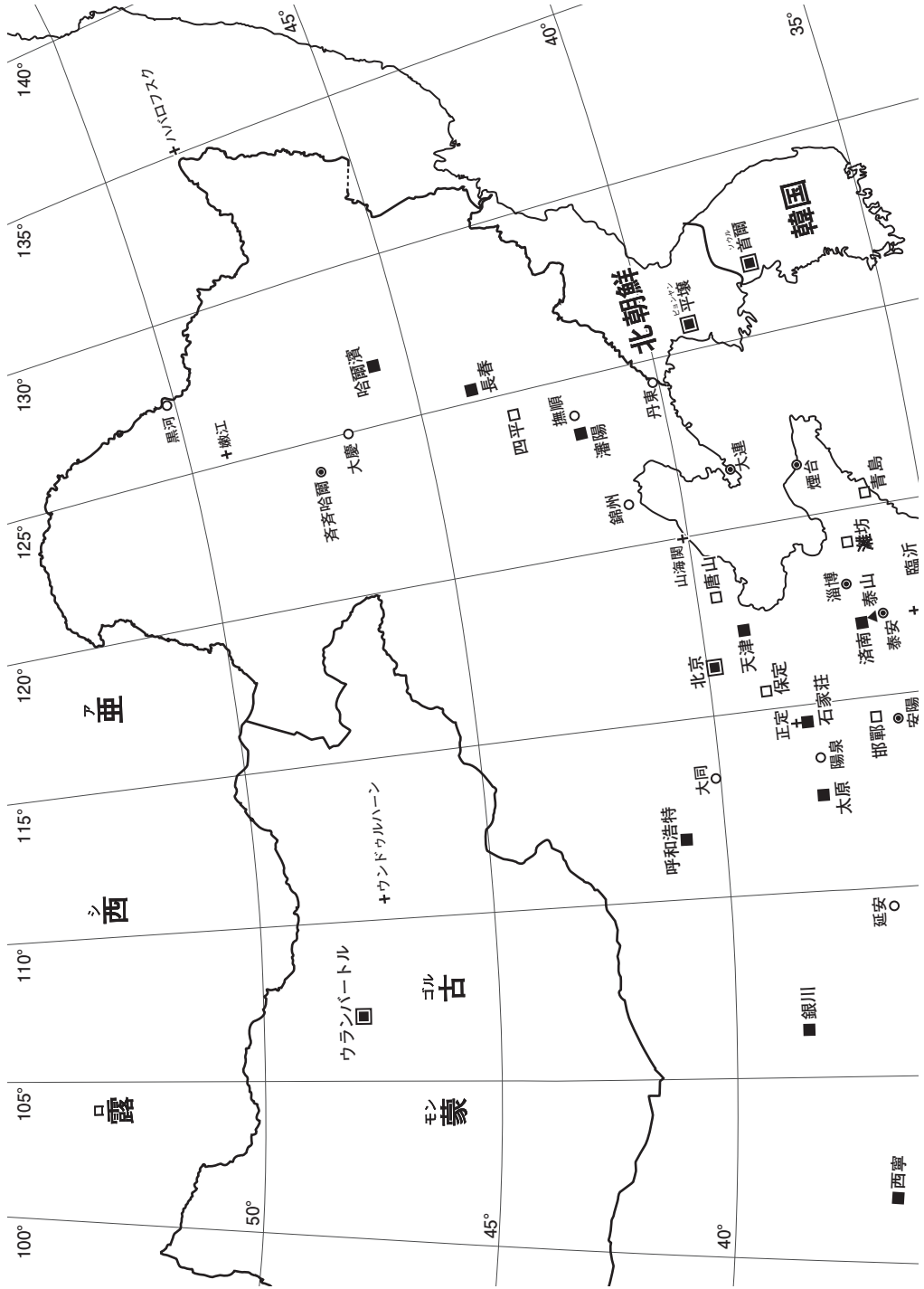
大陸出身で来日後も長らく中華民国籍(1936年帰化, 47年復帰, 79年再帰化)だった吳清源は, 国民栄誉賞受賞(2018.2.13)の囲碁棋士第1号の井山裕太(1989~, 日本棋院関西総本部所属, 09年九段)よりも偉い。「新布石革命」の共同提唱・実践(1933~34), 打込十番碁(10局1組中4番勝ち越しと為れば相手を一段格下に打ち込む争碁)で頂上級棋士を次々と一~二段格下に打ち込んだ偉業(39~56)等, 昭和日本に現れた世界碁史の第2黄金期を牽引した。

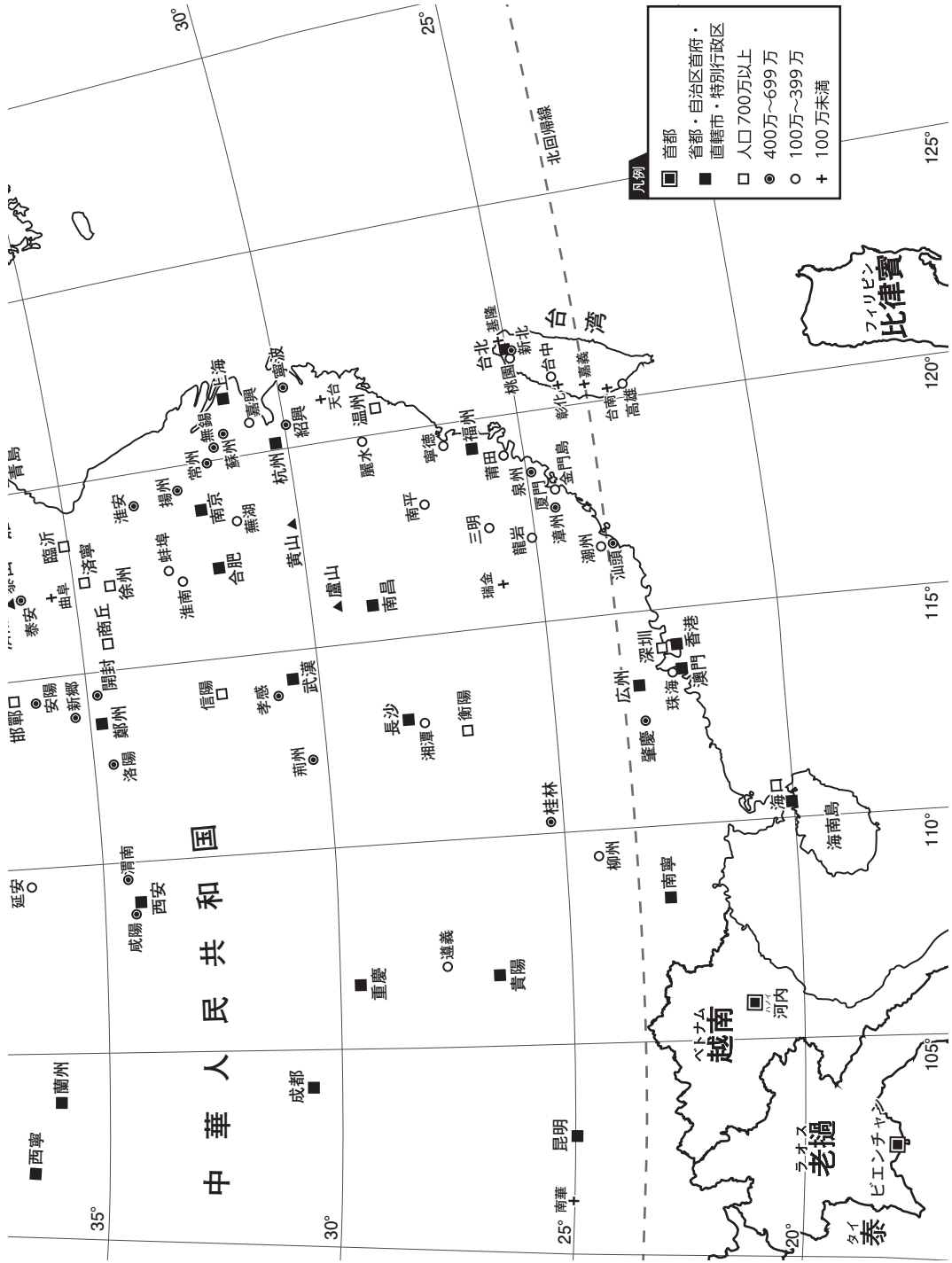
吳清源の祖籍の浙江桐郷県(今は市, 北緯30°38'・東経120°28')石門鎮は, 王貞治の祖籍と同じ麗水市に生れた柯潔 vs. 囲碁人工知能決戦の桐郷烏鎮に近く, 「棋聖」范西屏・施襄夏の故郷寧海と20kmしか離れず, 西北の嘉興と西南の杭州を貫く東亜「金三角」の線上に在る。彼は最初の帰化後の日中戦争の初頭も秘かに同郷の蔣と祖国を応援する意向を吐露したが, 弟子林海峰の祖籍の寧波も応昌期の生地と一緒に, 寧波奉化出身の蒋介石と縁が有る。

台湾碁界の発展は中国囲碁社(創設の翌1953年「社→会」と改称)初代会長周至柔(1899~1984)の功労が有り, 初代空軍総司令・参謀総長・台湾省政府を歴任した1級上将の彼は, 上海・江蘇・浙江に基盤を置き同郷を重用する蒋介石の傾向を映して, 浙江臨海県(今は市, 北緯28°52'・東経121°15')の人である。吳清源は1952年に中国囲碁社の「棋聖」号授与を辞退し「大国手」を受け, 林海峰も名人位獲得後66年「国手」と成り同じく蔣に接見された。

人生に関った懐かしの小物を紹介する『日本経済新聞』夕刊の「こころの玉手箱」欄に, 林海峰の連載(2016.6.13~17)初回「台湾の国手の贈位状/恩義の地, 歓待が励みに」が有り, 栄誉に対する感激・謝恩の念から異国で活躍する彼の帰属意識が窺い知れる。日本に渡った後60年余り囲碁一筋の人生だが, やはり幼少期を過し「国手」の称号まで授けられた台湾には深く恩義を感じている, という述懐は義理重視の日中共通の普遍的な美德を思わせる。

図5 東経100度以東の中国・台湾の主要都市、本稿で取り上げた一部の人物の出身地や出来事の発生地等(筆者作成)





上海生れの林海峰は第2次国共内戦（1946.6.26 勃発）の最中に4歳で台湾に移り住み、渡日まで6年だけ暮らしたが、節目節目で台湾の人々に励まされ勇気付けられたと言う。上海と台北の緯度差5度5分（31°10'と25°05'）と経度差4分（121°33'と121°29'）は、『東経139度』の5神社間の最大差（同3度1分と23分）と比べて、緯度差を考慮した経度の近接率が9.7倍高く、前出の台湾近海大地震と遼寧海城地震の同3.1倍の2乗をも上回る。

応氏杯の創設者応昌期も寧波生れ→上海就学→福州在勤を経て1945年に台湾に転勤したが、寧波の東経121°33'は上海と寸分の差も無く同じ経度上に人生初の移住をした訳である。蒋介石も辛亥革命の直後に故郷（今の寧波奉化区）を離れて最大都市の上海で成功の機会を求めたが、大陸・台湾で22年強・25年強の執政をした彼の出身地の経度（121°25'）は、経度差1度51分の上海に対し上海→台北と同じ4分降である。

第1次内戦は南昌蜂起・中共軍創建（1927.8.1）に始まり抗日統一戦線の結成で終息したが、第2次国共合作の合意に至る蒋介石・周恩来談判（37.6.8～7.17）が開かれた廬山は、江西の九江市南部に在り南（緯度差53分）の省都南昌と経度が近い（115°58'と同53'）である。第2次は中原の湖北・河南省境の中共支配地域に対する政府軍の猛攻から拡大し、廬山の西北290^{キロ}に当る湖北礼山県（今の孝感市大悟県、31°34'・114°19'）で最初の戦火が噴き出た。

中共軍は遼（寧）瀋（陽）戦役（国民党側の名称＝「遼西会戦」、1948.9.12～11.2）で戦略的な反攻を始め、圧勝の決め手と為る遼西省錦州市（今の遼寧同市、北緯41°06'・東経121°08'）の攻略は、東北制圧後の南下席卷で敵の同じ経度区内の上海陥落と台北への撤退にまで波及した。北緯35±1度地帯の首都統出や東経114度台の河北正定・武漢・深圳・香港と習近平の相関等を思い起すと、「歴史は緯度軸に生れ、経度軸で動く」という命題を思い付く。

次も大勝した淮海戦役（11.6～翌年1.10）は国民党側の「徐蚌会戦」の名称の様に、徐州と安徽北部の蚌埠市（北緯32°06'・東経117°25'）を中心とする広域が戦場で、3大戦役の掉尾の平津戦役（11.29～翌年1.31）は北平（北京）・天津が焦点を為した。最後の国共内戦は文字通りの「中原逐鹿」（中原に鹿を逐う。中央の地で帝位を争う）で幕を開け、渤海湾に始まり同圏域に終わった3回の会戦で勝敗を決したが、東部沿海地域を制した方が全土の支配権を得た。

中国人民解放軍は広東の南端から幅25^{キロ}の瓊州海峡を渡って海南島を強攻・占領した（1950.3.5～5.1）が、福建廈門・泉州市（北緯24°55'・東経118°35'）と向き合い最短距離が2.1^{キロ}の金門島（24°27'・118°21'）の奪取に完敗した（49.10.25～27）。国民党は旧日本軍の根本博中将（1891～1966）に指揮を託して死守でき、愛棋家の福建軍首長葉飛（1914～99、比律賓呂宋島生れ、後に海軍司令、上将）は、碁界でも自滅を招く過信の所為で終生悔恨の苦杯を喫した。

抗日戦争中の敵の手を借りて内戦の勝者を撃退した結果、台湾は大陸の武力征服の芽を完全に取り除いた。金門島が真ん中に在る東亜「金三角」の一隅を為す台湾は、幅130^{キロ}超の海峡の「天然屏障」（天然の障壁）に守られて、大飢饉で3千万が餓死し「文革」で億

単位の人が迫害される悪政から逃れた。平和国家の日本と同じ自由主義体制に入った結果、大陸の1人当り域内総生産が27年遅れて1万ドルに達した2019年にはその2.5倍も有る。

陳毅は「文革」初に失脚し碁を楽しめず痛で古稀の人生を終え、国家体育委员会主任(大臣)賀龍(1896~1969, 同じ政治局委員・副総理・中央軍委副主席・元帥)も、2年半監禁され劉少奇と同じ末路を辿った。国家体委の軍事管制責任者(1968~71)曹誠(1916~2003, 元総参謀部軍訓部長, 少将)は、69年から囲碁を所管の競技項目から外すよう周恩来に2度提言した。対日外交の必要性に鑑みて却下されたが、理解の無い武人の不熱心は改められなかった。

囲碁の「種子」を残すよという周恩来の意向に由り、「文革」開始早々に解散した国家集訓隊の創設成員14人中、7人が1970年に北京第3通用機械工場に労働者として配属された。南方の故郷から遠く離れた地で切磋琢磨を続けた「3通用7兄弟」の内、陳祖徳・呉淞笙・王汝南・華以剛・黄徳勳は九~七段(序列2~6位)と成り、邱鑫・曹志林(1947~、74・77年全国個人戦準優勝)は專業入りせず、故郷の上海で其々教練と囲碁著述家に転身した。

囲碁国手の種は廢業中の7人で足りるという浅見は、対外交流が途絶え「知識無用」論が罷り通る暗黒な時代には何の変哲も無く、寧ろ根絶せず「冷凍保存」が施されただけで有り難い。聶衛平も「文革」の混乱で不良少年と化し、北京から黒龍江の農場へ下放後に自暴自棄に陥った。同じ境遇の程曉流(1949~、福建福州市閩侯県「北緯26°17'・東経119°08'」出身、82年六段)と碁を打つ為に、互いに雪国の寒天下で数十キロも歩行で往復せねば為らなかった。

転義として物事を命懸けてする事を表す「一所懸命」は中世日本に生れた和製漢語で、元の意は賜った領地に生命を懸けて生計の頼みとする事、又その領地である。中国では他郷で故知に遇う事が人生の4大喜びに入る様に人の流動性が高く、新天地を切り拓く為の他所への移住や身を守る為の居住地からの脱出は能く有る。福建が中国で域内方言差の最も甚だしい1級行政区と為る事は、古代の越・中原の戦乱に由る難民等の流入が端緒である。

唐末~宋初に華北の黄河流域を支配した5代王朝(後梁→後唐→後晋→後漢→後周)の同時代に、華北の一部と華中・華南の地方政権の10国が有った(呉[902~37]・前蜀[03~25]・楚[07~51]・荆南[24~63]・呉越[07~78]・閩[09~45]・南漢[17~71]・後蜀[33~65]・北漢[51~79])。閩(福建、今も同省の略称)は初代国王の王審知(909~25, 光州固始県[今の河南信陽市固始県、北緯32°11'・東経115°40']出身)の親民政策に由って、経済発展・文化振興の途に着いた。

閩に外来者が流入したのは、戦国時代の楚(?~前223, 湖北・湖南を中心とする広域)に滅ぼされた越(?~前306頃, 浙江一带)の王族等の亡命に遡る。楚の都は丹陽(河南南陽市淅川県、北緯32°41'・東経111°41')→郢(湖北荊州市荊州区、30°23'・112°07')→陳(河南周口市淮陽区、33°40'・114°51')→寿春(安徽淮南市寿县、32°17'・116°45')と易ったが、会稽(浙江紹興市、30°・120°35')が都と為る越は華中の覇者に併呑され、一部の南遷で閩越が形成された。

浙江は10万平方キロ中70.4%が山で、平原と河川・湖が其々23.2, 6.4%を占める事から、

耕地の少なさを形容する「七山一水二分田」で知られるが、福建の「八山一水一分田」は更に逼迫する。共に商魂が逞しい両地の結合も手伝って、閩は多様な人材・文化を梃子に数世紀で先進地域入りしたが、人口密度の過剰化と海上貿易の発達に対応して海外へ進出する動きが盛んで、浙江人の北京・上海への移住に対し南洋（東南亜）行きが多かった。

対岸の台湾の本省人や東南亜の華僑・華人の多くは福建からの移住者及び子孫で、大半が閩南の泉州・漳州（市、北緯 24°31'・東経 117°39'）・廈門からの移民で、新嘉坡・馬來西亞等には閩南の莆田や閩東の福州等からの移民も居る。海流の関係で近い日本とは近世に福建人が倭寇と結託して密貿易を行う事も屢々有り、改革・開放後の渡日中国人には閩東の福清市（24°43'・119°43'）・福州の人が目立ち、福建は日本への密航の出発地にも能く利用された。

福建は東亜「金三角」内の上海・浙江・広東と一体を為し、台湾や南北両端の新・日両国と密接な関係を持つ。新嘉坡の国父李光耀（1923～2015、56～90 年初代首相）は客家（広東中心の東南諸省に於ける、華北から南下移住して来た漢族の子孫）系華人の 4 世で、祖籍（1862 年に英国の海峡植民地に移民した曾祖父李沐文 [1848～85] の故郷）は、広東東北部の梅州市大埔県（北緯 24°21'・東経 116°32'）であるが、広東・福建省境の西 25 キロに在り漳州・廈門と緯度が近い。

新嘉坡は 2018 年に経済協力開発機構実施の学習到達度調査で 2 位と為ったが、中国最強の北京・上海・江蘇・浙江の花形選手団に対する僅差は実質的な優勝を意味する。翌年の 1 人当り域内総生産の 6.5 万ドルは日本の 4 万、香港の 3.8 万、韓国の 3.1 万、台湾の 2.5 万を超える。今 6 億人の平均月収が 1 千元（≒ 1.5 万円）に過ぎぬ中国との貧富の格差は月と黠であるが、中国の「先富・首富」地域が入る東亜「金三角」の一端の頂点に相応しい。

多くの国民が中国系の血筋を引く新嘉坡は地縁・「史縁」も有って中・台の仲介役を務め、兩岸の対話窓口機関（大陸の海峡関係協会と台湾の海峡交流基金会）責任者初会談（1993.4.27～29）、首脳（習近平と馬英九 [1950～、香港生れ、2008.5.20 より総統 2 期・8 年]）初会談（15.11.7）の地と為った。米朝首脳（トランプ大統領 [1946～、2017.1.20 就任] と金正恩最高指導者 [1984～、11.12.17 就任]）初会談（18.6.12）も、東北亜の対立を和らげるこの東南亜の要地で催された。

新嘉坡の世界有数の学力と渡り合えた北京・上海・江蘇・浙江連合は高い得点力を見せ、本土の囲碁九段棋士 47 人に占める出身者（各 3・10・2・4 人）の比重（40.4%）、世界戦優勝経験者・回数に占める比率（23 中 7 人、45 回中 16 回、其々 30.4、35.6%）を見ても、面積・人口が本土の 2.3、13.2%に過ぎない 4 地域の抜群な智力水準が認められる。公明正大な競技に反する狡賢さへの非難は扱って置き、頭脳競技の最強軍団に選ばれた合理性が有る。

2012 年の上海勢の単独出陣も九段の初代 3 人中 2 人（66.7%）と現在の 21.3%、42 年前の国手「種子」7 人中 4 人（57.1%）の占有率等で納得できる。国家集訓隊の「文革」中の解散後に予備役として温存された 7 人の待は、他に安徽・江蘇・四川各 1 名の分布である。江蘇は上海と共に 2015・18 年学習到達度調査の中国代表の半分を担ったが、両地の「3 通

用7兄弟」中71.4%と初代九・八段5人中6割と照らしても順当な布陣と言える。

再開の見通しが無い儘の囲碁事業の中断の際7人衆を帰郷させず北京に留めた采配は、**地方の選良**（中国語＝「精英」）を**首都の傘下**に収める**中央集権国家の1強集中志向**に由る。中共治下の碁界の上海1強は北京に転勤した陳毅の政治力も物を言わせて、**北京在住の聶衛平が覇者と成った事**で「**2都物語**」は復活した。直近2回の学習到達度調査の「**国家隊**」に北京も加勢したのは、「北（京）上（海）広（州）深（圳）」の序列にも合致する。

広東勢の2015年参加後18年に浙江勢と交代したのは自然な成行きで、「**上海最強**」→「**北・上・広＋蘇**（江蘇の略称）」→「**京・滬**（北京・上海の略称）**＋江・浙**」**新4強**は、何れも長年の実情に適った「**鉄板**」の定番である。広東・浙江間の**福建は江蘇・浙江並みに科挙の合格率が高く**、南宋の大儒朱熹（1130～1200）も南劍州尤溪県（今の三明市同県、北緯26°08'・東経118°14'）で生れ育ったが、同省の出番が無い事は実力よりも知名度が及ばない所為か。

閩に流れ込んだ越（浙江）も越を滅ぼした楚の首都所在の河南・湖北・安徽も囲碁が盛んであるが、本土の九段棋士の出身地の19省・直轄市（香港・澳門を含む1級行政区は33）の内に、**福建が入らないのは同じ先進地域の安徽・天津の欠如と共に不思議**に思える。初代最高段位者（五段）の過惕生（安徽人）・劉棣懷（祖籍安徽の江蘇人）の北京・上海定住と似て、**呉清源を始めとする国内外への人材流出**で要因の一端の説明が付く。

福建の高手は呉清源（閩侯県出身）と長兄浣（1910～94、日本棋院43年贈三段5人中5位）から、現（2019）八段23人中の張璇・伊凌濤（2000～、南平市轄邵武市〔北緯27°15'・東経117°27'〕出身、18年昇進）まで輩出し、**祖籍莆田の呉淞笙を半分の福建人に数えれば初代九段は上海1.5、遼寧1、福建0.5**に変わる。「福建莆田（生れの）人」説が本当なら本土の九段は最初から同省を含む事に為るが、公式記載の「**聶衛平 河北深県人**」と同じ事実誤認であろう。

「国語辞書＋百科事典の最高峰」と銘打った『**広辞苑**』（新村出〔1876～1967、言語学者・文献学者〕編、岩波書店）では、第6版（2008）の【朱熹】の説明に「**徽州婺源**（現、江西省）を父祖の地とするが、実は福建の人」と有り、後半は第7版（18）で「**もっぱら閩（福建）で活動**」に改められた。言わば「**1人多籍**」に由るこの種の「**実は**」は実に多い。**父祖の地が本人の出生・永住の地の前に出て且つ重んじられる事は興味深い**。

中国の国語辞書＋百科事典の最高峰と為る『**辞海**』（辞海編輯委員会編、主編【編集主幹】＝夏征農〔1904～2008、政治家・辞書編纂家〕・陳至立〔1942～、政治家、教育相・国務委員等歴任〕、上海辭書出版社）の第6版（09）の同項目は、「**祖籍徽州婺源**（今属江西）、**生於南劍州尤溪**（今属福建）、**僑寓建陽**（今属福建）」（祖籍は徽州婺源〔今江西に属す〕、南劍州尤溪〔今福建に属す〕に出生、建陽〔今福建に属す〕に移住）と述べ、**人生の原点・舞台と為る生地・居住地**を強調する。

江西東北部の上饒市婺源県（北緯29°18'・東経117°46'）は安徽・浙江との境界に在り、言語・文化面で安徽南部の旧徽州地域（今の黄山市、29°54'・117°59'）に近い。江沢民は揚州で生れ

育ち、南京・上海で就学し、上海・長春・武漢・北京の間で転勤を繰り返す、引退後に第2の故郷の上海と故郷揚州に移住したが、人に由って複数有る祖籍は婺源江湾鎮江湾村だけで、党・国・軍首領在任中も先祖を敬う伝統から婺源への愛着を明言した。

毛沢東は建国前の『辞海』の新編を国家的な事業とし、1957年に舒新城(1893~1960、湖南澱浦県[北緯27°48'・東経110°38']出身、教育家)に委ね、上海での編纂・出版を指定した。夏征農と陳至立(80年代の上海市委の常務委員と宣伝部長)は主編と為ったが、夏が生れた江西豊城県(今は市、28°04'・115°56')は舒と緯度が近接し、副総理格の國務委員への栄転で南方人の優勢を示した陳の故郷の仙游県(25°27'・118°41')は、呉淞笙の祖籍の福建莆田市に在る。

呉淞笙の出自に就いての権威有る記載は、『囲棋年鑑2009』(主編=中国囲棋協会・『囲棋天地』編集部)に見える。中国囲棋協会・中国体育報業総社(新聞業本社)合同の同誌の同年増刊IIは、呉の急逝を受けて追悼文を2篇載せ、海外在住の中国棋士の一覧を掲げた。8カ国に居る40人の氏名・性別・段位・略歴・現状が列挙され、出身地は牛力力・嫻嫻姉妹と馬亜蘭・宋麗・尚虹等11人が未記載と為るが、生い立ちを示す基本情報として重要である。

王汝南の「記念呉淞笙(呉淞笙を偲ぶ)の「淞笙生長在上海(淞笙は上海で生れ育った)は、1963年の国家集訓隊入り以来20年余りの付き合いに基づく正確な証言である。無署名(編集者か)の「他曾擁有一個時代(彼は曾て1つの時代を成した)に、「呉淞笙生於1945年4月4日、福建莆田人(呉淞笙は1945年4月4日に生れ、福建莆田の人)と有るが、「1945年4月4日生於福建莆田(1945年4月4日に福建の莆田にて出生)の意味ではない。

周恩来は南北境界線上の江蘇淮安(邵震中の出身地)に生れ淮安訛が強いが、先祖の墓が有る浙江紹興が祖籍で名前も紹興の家譜に載っているから、淮安人と自認する一方「浙江紹興人」とも自称した。「○○(地域)人」は生地・祖籍の両方を表せるので、呉淞笙の「福建莆田人」は「居居地(父祖の居住地)であり得る。聶衛平の「河北深県人」も父親聶春榮(1911~?)の生地由来し、自分の出身地に拠って「遼寧瀋陽人」とす当きである。

2008年夏季五輪・国際身体障害者競技大会(9.6~17)後の「頭脳五輪」(10.3~18)として、国際頭脳競技協会(05年成立)主催の第1回国際頭脳競技総合競技大会が同じ北京で行われ、囲碁・西洋碁・西洋将棋・象棋・橋牌の5項目が実施された。同協会主催・同種目の第1回国際頭脳精英(中国語=「智力精英」)競技大会(2016.2.26~3.3)は、中国の頭脳競技に掛ける熱意や自国の象棋を入れた政治力と財力を映して淮安で開かれた。

新設の国際頭脳競技名手(中国語=「大師」[巨匠])大会(2019.5.14~18)は、北京—淮安線の西の河北衡水市(北緯37°43'・東経115°52')で開催された。男女2人組戦の組み合わせ抽選の席で小林光一(1952~ , 78年九段)が往年の好敵手聶衛平に、此処は聶の出身地だという伝聞の当否を確認した処、自分は瀋陽に生れたが、此処(北35°に在る深州市[旧深県]を所轄する衡水)は父の生地、自分の「老家」(故郷)に当たると答えた。

新しい出来事として報じられた生地の披露によって、『囲棋年鑑』等の「河北深県人」の規定は漸く正しく理解でき、と同時に同省は九段未誕生地域と為った。生地と混同され易い従来の記述を当人が容認して来た事は、「故郷」衡水の囲碁発展を祈念・応援する今回の意志表示の様に、碁の世界へ導き陳毅に引き合わせてくれた父親に対する敬意も有ろうが、特に「三北」地域で顕著な中国人の大らかな国民性も一因と思われる。

『中国囲棋史』（主編＝陳祖徳，中国統計出版社，1999）の「附録二 中国国家段位棋手名单（棋士名鑑）」でも、「聶衛平 河北深県人，1952年8月17日生」と記され、「江鑄久 山東濟寧人」「劉小光 山東人」「江鳴久 山東人」と共に祖籍が採用された。出生時の前に出るのは父祖→本人の存在の順番に沿うが、生年月日の正確な記載と比べて生地の一部欠落が不備と言え、2級行政区の併記が九段に限る（他に「馬曉春 浙江嵊県人」）のも大雑把である。

「序」（王汝南）の前の頁に「囲棋教材編委会名单（編集委員会名簿）」が掲載され、主編・副主編（王）・執行主編（呉玉林）と編集委員会（華以剛主任，華榮副主任，委員12人）の氏名が示され、下の唯一の記載は校閲者の「責任校対：陳晨」（太字は原文）である。出版大国の日本では校閲係は黒子に徹し書籍に名前が表示が無いが、権利の自己主張が強い中国では「版權頁」（奥付）に出る事は普通で、錚々たる名家の顔触れの下に独り出るのは極端な例である。

『広辞苑』第7版でも50年前に永眠した新村出を唯一の編者として表紙に記すが、創設者を尊ぶ記念の方法は中国では現役陣の名利と衝突する故に有り得ない。中国の最も知名度が高い類書の『現代漢語詞典』（中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編，商務印書館）の第7版（2016）では、扉の裏に受賞歴が列記され、次の頁に往昔の指導役の両先哲に崇高な敬意を表すという謝辞が綴られ、次の3頁には歴代の責任者・担当者の氏名が延々と書かれる。

改革・開放時代の暁（1979.12）の初版以降の関係者全員記載は「名の文化」の現れで、資料・電脳担当者も歴史に名を留めている事は役目の大切さを思わせる。取り分け重要な校閲は漢籍由来の熟語「校書掃塵」（書を校するは塵を掃うが如し）の通りで、書物の校正は幾ら塵を掃っても掃い尽せない様に、誤脱等がその都度見付き完全無欠を期し難い。囲碁用語が語源と為る和語で言えば、「駄目」な「ぼか」（不注意に由る不意な失敗）は免れない。

時間制限が厳しく正解と照合できない囲碁の対局では失着率が軽く数%を超えるが、書籍の校閲は著者・編集者等が複数回で確認するから疎漏率が低い。中国の出版制度では1万字に1字以上の誤脱が有れば回収・交換の対象と為り、「万一」以下の99.99%超の精度は碁の絶対的な勝勢を形容する「九分九厘」の100倍に当る。勝率99%の対局も一瞬の見落しや誤算で台無しに為る頓挫と通じて、書籍の誤謬許容度の0.0001%も簡単に突破される。

『中国囲棋史』は当時の中国の未発達を現す紙の粗悪と同じく校閲も粗末で、島村俊宏（1912～91，日本棋院中部総本部所属，60年九段）を「島村俊」としたり，小林光一十段（選手権名）を「小林光十一段」としたり，第1回中日囲棋擂台賽主将決戦の聶衛平の1 $\frac{3}{4}$ 子（3

目半)勝ちを $\frac{3}{4}$ 子(1目半)勝ちとした。1/10 000に迫る様な過誤は囲碁の高度な専門性に疎い所為も有ろうが、棋士著者の無頓着も雑な作業を見過した側面も考えられる。

附録の名鑑の九段陣は本文中の初代授与の「聶衛平 陳祖徳 呉淞笙」の順でなく、最年長で本書主編の陳を最初に出し、「上海人、1944年2月19日生」と紹介するが、第3編「中国当代囲碁」第3章「囲碁新手的崛起」(囲碁新人の擡頭)第2節「陳祖徳」では、^{クローズ・アップ}大寫しと為る碁傑の生年を間違えて「(1945-)、生於上海」とした。齟齬を許した校閲者の点検漏れはともかく、全書に細かく目を通したはずの当人の無反応は不可解である。

日本語の「縁の下の力」に当る中国語は「無名英雄」と言うが、出版に携わる黒子も舞台で顔を出す氏名の明記は無名に甘んじたくない心理に由る。件^{くだり}の名鑑の陳祖徳の出身地・生年月日の後の「全国人大代表」(全国人民代表大會代表、国会議員に相当)、聶衛平の同「全国政協委員、全国特等劳模」(中国人民政治協商會議[共産党主導の政治助言機関]全国委員会委員、全国特等労働模範)に、棋士^{キャリア}の経歴・実績より社会的な榮譽・肩書^{かたがき}を重んじる価値観^{かいま}が垣間見える。

中国の棋士・碁界は一般的に名利・勝敗に敏感な半面、棋譜^{データ}の記録や数拠(計算・立論の根拠と為る数値・事実)の集約に注ぐ情熱が足りない。その所為で入段後公式戦通算勝利1千局達成の国内記録は唯^{ただ}1人、珍しく几帳面に全対戦の棋譜を取る習慣の有る古力が達成した(2016.5.18)。他の数人の強豪は同等の戦績を有すると見られるのに、過去を振り返らない主義^{みでぶしょう}や筆不精^{ふでぶしょう}の為か集計できず、同時期の日本21人・韓国8人に大に見劣りした。

在米華人の歴史家黄仁宇(1918~2000)は中国の「数目字(数値)管理」の不足^{かっぼ}を喝破したが、「数目」は「目数」と共に囲碁の価値・形勢判断の基礎を為す。張璇は男女棋士の相異として理性重視と感性偏重を挙げ、常昊が気に掛ける着手の利得の何目又は何分の1目は、自分は計算できるが実戦で考えた事が無いと語った。夫妻の実力の違いの一端と為る数値把握^{はあく}は多分野で求められるが、日本人と比べて中国人は一般的に余り得意ではない。

周恩来は澳門問題の会議で一同を試す為に面積を訊き、陳毅等が返答に詰まる中の澳門事務責任者の「十数万平方^{おこ}」の返答に怒って、浙江の大きさはどれぐらいかと嫌味を言った。澳門の27.3平方^{おこ}と浙江の10万平方^{おこ}は3663倍の差が有りいい加減も度を越したが、座標数値の僅差に着眼した松本清張の『東経139度線』、交通機関の正確無比な定期運行を不在現場証明^{アリバ}の前提とする長篇『点と線』(1958)は、中国の作家には思い付かない。

『中国囲碁史』は瑕疵^{かし}に關らず初の古今碁史として貴重な史料であり、曖昧な出身地に就いても精緻化^{なと}の基礎を提供している。例えば、第3編第4章「囲碁運動的挫折和恢復」(囲碁事業の挫折と復活)第5節「聶衛平」では、「河北深県人」に続く「長在北京」(北京で育った)と有る。或いは、名鑑で「山東濟寧人」とされた江鏞久は本文の第1回中日囲碁擂台賽^{にっちゅうスーパーいご}の記述で、「在山西太原成長起来的戦将」(山西太原で成長して来た勇将)と育成の地が書かれる。

1985年全国個人戦男子組の総括は「異軍突起」(別の軍隊が突然立ち上がる。異なる新しい勢力

が突如勃興する)を讃え、優勝に輝いた23歳の山西代表方天豊に就いて「生於山西省太原市，原籍湖北」と記した。一躍脚光を浴びた無名選手として湖北の阮雲生と河南の馬石も挙げられたが、阮(1955～，同年五段，88年七段)の生地は方(89年八段)の祖籍と同じ武漢で、名鑑で「遼寧人」と為る馬(1966～2018，84年四段，91年七段)は洛陽で生れ育ったのである。

1983年同棋戦の「爆出“冷門”」(番狂わせに為る)の主役は女子個人戦優勝の河南代表豊雲で、名鑑の「遼寧人」と違って本文の記載は「河南省安陽人，16歳」である。名鑑中の牛力力の「河南人」も2級行政区未詳の祖籍で、出身地は同年同月(1961.9)生れの夫趙国栄(象棋特級大師[90年認定，8人目]，全国個人戦優勝4回[90・92・95・2008])と同じ哈爾濱であるが、方天豊・馬石の祖籍と通じて当該地域の囲碁の層の厚さを思わせる。

1976年訪日団で良績を上げた聶衛平は「我国黒龍江省選手」と書かれ、後に牛力力・嫻嫻が代表を務める同省は彼の在勤地と為った故である。日本の身体運動国際戦の報道で自国選手の在籍企業・学校を括弧付きで附記する事が多いが、中国では国家の代表につき細分化した属性は表示されない。碁界の慣習は戸籍所在地を用いる事が多く、過去の公式戦に出た超地域の例外は解放軍隊・鉄道系統の火車頭(機関車)隊・石炭系統の煤鉞隊である。

1964年授与の「五段：北京過惕生，上海陳祖徳，上海呉淞笙，上海劉棣懐 / 四段：山西沈果蓀，上海趙之華，上海趙之雲，江蘇鄭懷徳，北京金亜賢，北京崔雲趾，安徽黄永吉，上海王幼宸，安徽朱金兆，江蘇陳錫明，北京張福田，河南陳岱，上海魏海鴻 / 三段：広東齊曾矩，河北蔡学宗，上海朱福元，上海孫歩田，湖北邵福棠，湖北劉炳文，福建黄良玉，浙江竺沅芷，四川黄秉忱，上海殷鑫培(二・初段は略)」の表記も、在籍地域への帰属が示されている。

日本囲碁使節団初訪中の1960年に北京・上海・杭州で其々2・3・1回の交流戦が行われ、北京碁界は過惕生・金亜賢・崔雲趾(生歿年未詳)・齊曾矩(1924～?)・黄永吉を出したが、生粋の北京人が半数未満の陣容で10局中1局だけ勝ったのは安徽「援軍」(過の同郷)黄である。上海の劉棣懐・顧水如・王幼宸・魏海鴻・汪振雄(生歿年・出身地未詳)・陳祖徳・趙之華も、南京・北京・湖北人の劉・王・魏と北京から移住した汪は全て「上海棋手」とされる。

『中国囲碁史』の回顧に曰く、上海は当時の囲碁愛好者が最も多く水準も最も高い都市で、老将5人・新鋭2人の布陣は国内最強だが、15局の内に劉棣懐・王幼宸だけが1勝した。杭州では浙江の高手不足を補い他地域・団体に実戦の機会を与える為に、地元の重鎮張李源(生年・出身地未詳)と共に上海の呉淞笙・四川の黄秉忱(同)・南京在住の鄭懷徳(同)・解放軍の姚熙(同)が出たが、南北2都の選手に及ばない棋力で5局全敗に終わった。

時の2軍に属した呉淞笙は4年後に最高段(五段)に昇り、同年の全国個人戦準優勝を次期に再演し、1974年の訪日で6勝1敗と気を吐いた。『中国囲碁史』は「陳呉時代」の評判を取り上げる一方、1980年新体育杯戦準優勝(聶衛平に1-3で敗退)の良績も有る初代九段を附録の名鑑に載せず、本文でも陳祖徳・聶並みの2頁を割くどころか、馬曉春・江鏞久・

方天豊等の様に数行で紹介する事も無く、出国に伴う離籍の扱いが礼遇ならぬ冷遇と為る。

同書では在勤地の上海の棋士と為る半面「上海人」か「福建莆田人」の記載が無いが、戸籍・「碁籍」(碁界在籍を表す造語) 所在の上海が生地である事は、同地に生れた意味を連想させる名前でも傍証が得られる。「淞」は江蘇から上海に流れる呉淞河の略で、1898年開通の淞滬鐵路(上海市内～近郊の呉淞鎮間の鉄道)、1937年の淞滬会戦(日本側称「第2次上海事変」)等と上海を表し、「笙」(雅楽等で使う管楽器)は同音の「生」(shēng)に因んだと断じ得る。

功夫映画俳優成龍(英語名 Jackie Chan, 1954～)の本名「陳港生」は香港生れに由来し、祖籍(安徽和県、北緯31°42'・東経118°16')と異なる生地に抱く帰属意識が現れる。改革・開放時代に投獄・国外追放された民主活動家魏京生(1950～)は名前通り北京で生れ、上海人の場合「滬生」は有り触れた名前である。王滬寧(1955～, 党中央政治局常委)は公式履歴で山東萊州(市、37°14'・119°55')人と為るが、地名が示す様に生地は上海である。

成都軍区(西南広域部隊)・第2砲兵(今の火箭軍)政治委員等を歴任した張海陽の名前は、父張震(1914～2015, 湖南平江県[今岳陽市轄、北緯23°45'・東経113°40']出身、軍委副主席等歴任)が付け、出生(49.7.16)前の上海解放(5.27)を記念する意味が込められた。唯一の父子上将(改革・開放以来の最高階級)の親と同じ華東野戦軍のNo.2粟裕(1907～84, 55年大将)は、同年に行政長官を兼務する南京の略称「寧」を以て同市で生れた娘に「惠寧」の名を付けた。

粟惠寧の夫陳小魯(1946～2018, 山東臨沂市[北緯35°22'・東経118°18']生れ)は華東野戦軍司令兼政委陳毅の三男で、名前は『孟子』「尽心上」の「孔子登東山而小魯, 登泰山而小天下」(孔子東山に登りて魯を小とし, 泰山に登りて天下を小とす)から取り、父親の山東野戦軍司令在任中も「魯」(山東)の縁起である。長男吳蘇(1942～)・次男丹淮(1943～)は(江)蘇北(部)・淮(安徽)南(部)の生れで、生地を人名に入れる中国流は地縁・「史縁」重視の発想に由る。

呉淞笙の上海籍は祖籍の福建の本土九段欠如の要因と為ったが、1966年全国個人戦1～5位の陳祖徳・呉・羅建文・王汝南・黄良玉には、福建人は羅・黄(1944～, 福州出身, 82年六段)に呉も加われば2.5人に数え得る。呉の父祖の上海移住に見る東亜「金三角」内の両地の親縁性を現す様に、黄夫人の陳慧芳(1954～, 78年全国女子個人戦準優勝, 88年五段)は上海生れで、常昊・張璇の「上海男+福建女」の組み合わせと反転の対を為す。

黄・陳夫妻の合計十一段は黄の同郷羅建文・建元(1953～, 82年五段)も同じで、隣県出身の程曉流も羅兄弟・黄と共に段位授与元年後の昇進が無いが、全国個人戦77年5位・81年3位と82年新体育杯戦準優勝で羅七段・黄六段を超えた。新体育杯戦決勝の第1～2/3～5局は福州/北京で行われたが、彼は辛勝した聶衛平や閩侯同郷の呉清源と同じく幼い頃(呉の場合は生後4ヵ月)から、北京で育ち囲碁の入門も故郷と関係が無い。

程曉流は20歳時に3歳年少の聶衛平と同じ「知識青年」として、黒龍江嫩江県(北緯49°51'・東経125°47')の山河農場に下放され野良仕事に従事した。北京の東北1300^キと所轄の

黒河市の西南 200^キに在る同県は、内蒙古に隣接し黒河—騰衝線の西側に位置する。中国人が喜んで望む移住先は条件がより良い処に限るが、元の環境と雲泥の差が有る都落ちは彼等にとって、照明も出口も無い暗くて長い隧道に抛り込まれた様な災難である。

聶衛平の名前は朝鮮戦争への中国介入の大義名分の「保衛和平」(平和を護る)の略で、同名の劉衛平(1957～, 劉震[1915～2012, 湖北孝感(県→市, 北緯 33°55'・東経 113°57')]の人。中国人民志願軍[朝鮮戦争参戦部隊]空軍司令・解放軍空軍副司令・新疆軍区司令歴任, 空軍上將)の次男, 名前に祖籍の陝西富平県を含む習近平と共に, 高官子弟が多い北京の彼の名門中学の「3平」と並称され, 「文革」初期に「革命造反派」青少年の乱闘に巻き込まれる事も有った。

活路を目指す移住・転職を勧める中国の諺に, 「樹挪死, 人挪活」(樹は場所を移せば死に, 人は場所を移せば活きる)と有る。囲碁術語の「捌き」(打ち込みや勢力圏の消しの際に弱い石の始末を巧く付ける打ち方)は中国語で「騰挪」と言い, 其々「場所を空ける」「移る」意の2字は, 全てを助けようとせず捨石の手筋(有力な巧手)で形を整える等の高等戦術を指す。「挪」は「捌」と通じて手偏に他を表す字から成り, 局面打開の為の取捨・転換を言い得て妙である。

細川千仞(1899～1974, 日本棋院関西総本部所属, 57年八段, 71年引退・九段贈与)は, 「乱戦の雄」の野性的な棋風らしい「碁は断に在り」の名言が有る。清以来の中国の囲碁格言の「棋逢断处生」(碁は断点から生れる)も, 相手の石を切断する事で活路や勝機を掴め得る意である。作家やましたひでこ(1954～)が唱えた片付け術の「断捨離」(2009)も「騰挪」に適するが, 聶衛平等に降り掛った毛沢東の「断捨離」は政争の道具の御祓箱の廃棄処分である。

「樹挪死」の字・義と重なる警句「不在一顆樹上吊死」(1本の樹の上で首を吊って死ぬ)は, 分散投資の必要性を説く欧米の金言「全ての卵を1つの籠に盛るな」と同じ主旨で, 特定の人や物事に対する完全な依存を戒め危険性回避の効用を教える。中世日本の「一所懸命」は武士が領主から下賜された領地を固守する合理性が有るが, 「文革」中の3千万人の中学・高校卒業生の農村下放は大変な不条理で, 寧ろ1本の樹の上で首を吊らせる愚行である。

囲碁の「凌ぎ」(敵の勢力圏で嚴重な包囲・攻撃を去なして生存を図る打ち方)は, 中国語で「治孤」(孤立した石を治める)と言う。米ソ両超大国・陣営の包囲網で世界中に孤立した毛沢東時代末期の在り方も, 生き残りに懸けた闘争は「治孤」で孤絶の統治は「孤治」(造語)と言える。最晩年の毛の両眼失明に近い病態に因んで言えば, 当時の中国は複眼的な視座どころか一目瞭然の単眼的な視点さえ無く, 鎖国体制で大海を知らぬ井の中の蛙と化していた。

日本は日中戦争の拡大で亜細亜初開催と為る1940年東京五輪を返上し(38.7.15閣議決定), 太平洋戦争(41.12.8勃発)中「敵国語」の使用・学習を禁じ文化まで鎖国した。棋士の勤労徴用・教育召集・応召入隊や空襲に由る日本棋院本館・中部囲碁連盟の建物の全焼(1945.5), 棋士の自宅焼失・爆死と被害が多かったが, 広島に米軍が原爆を投下した日(同8.6)にも同市近郊で本因坊戦挑戦手合が行われ, 新聞棋戦の棋譜掲載も敗戦の3ヵ月まで続いていた。

10年の「文革」は8年の抗日戦争と並ぶ20世紀中国の最大級の災厄であるが、空襲に由る棋士の死亡や自宅焼失の様に惨禍こそ無いものの、棋戦が無く実力相応の仲間と打つ機会も少ない事は光陰・機会の喪失を意味する。上海在住の趙之華・之雲兄弟でさえ碁を始めた後の数年間に棋譜に接し得ず、父親の酒の撮み物の揚げ落花生を包んだ日本の棋書の半頁を見て、店に駆け付けて残りの部分を貰い、漸く本格的な勉強が出来る様になった。

聶衛平は張福田（生歿年・生地未詳、1966年全国個人戦6位）・雷溥華と過惕生・旭初に学び、秀栄（1852～1907、十七・十九世本因坊[84・86年襲位]、名人・九段[06年就任・昇進]）の打碁の勉強で芸域を広げた。13歳時に全国少年少女囲碁大会児童組で優勝し頭角を現したが、翌年の「文革」勃発で7年も棋戦が無い時代に沈んだ。日本の満蒙開拓団（1931～45）の入植者よりも惨めな境遇に直面した彼は、暫く袋小路に沈淪し自墮落の放蕩で拘束までされた。

彼の上達は帰省の時「3通用7兄弟」の勤務先の宿舎に入り浸った特訓が決定的で、国家集训隊解散時の「種子」保存は「大霸王」陳祖徳に次ぐ「小霸王」聶の擡頭に寄与した。陳は1973年に周恩来の指名で唯一の棋士として中日友好協会代表団の訪日に加わったが、交流戦の3-6の負け越しは7年の空白を物語る。彼は1956年に陳錫明と共に「神童」として囲碁留学の話があったが、両陳とも両国の関係悪化で実らなかった事で悲運を蒙った。

呉清源に見る囲碁の漢字・儒教圏繁栄と棋士の国民性・文化経験の作用

聶衛平は第3回中日囲碁擂台賽（1987.5.2～88.3.14）の主将決戦で加藤正夫（1942～2004、78年九段推挙）を倒したが、9選手中7番手として王群・銭宇平・芮迺偉・江铸久・曹大元を連破した山城宏（1958～、日本棋院中部総本部所属、85年九段）は、白の注文に乗らず隅をあっさり譲って外側の辺に進出する聶の黒79（1つの石から1間隔で斜めにずらす小桂馬）に変り身の巧さを感じ、風土に由る国民的気質か天才に特有の視野の広さかと賛嘆した。（図6・7）

「殺し屋」加藤正夫は苦しい局面で白66～70で威勢良く攻めたが、聶衛平は黒71以下を利かし（相手が応じざるを得ない先手で、利益に為る手）、黒77の並びで中央の凌ぎを兼ね、腰の据わった彼の強さが滲み出ている様な1着として日本で評価された。極極簡明な局面を築く自在な打ち振りは最盛期の呉清源を思わせると山城宏は語ったが、呉の形勢判断の明るさと優勢下に逃げ切り勝ち切る逃げ足の速さは天下一品の定評が有る。

東晋（317～420）末～南朝・宋の將軍檀道濟（？～436）著兵法「三十六計」は、各6計の「勝戦計」「敵戦計」「攻戦計」「混戦計」「併戦計」に次ぐ「敗戦計」の最後に、「走为上」（走ぐるを上と為す）と締め括る。二十四史中の『南齊書』『王敬則伝』の「檀公三十六策、走是上計」から、中国と日本で熟語の「三十六計、走为上計」と「逃げるに如かず」が生れたが、中共軍の「西遷」長征も国民党の大陸撤退も残存を確保し反転を待つ為の逃亡である。

図6 第3回日中スーパー囲碁主将決戦，聶衛平（黒，込5目半）vs. 加藤正夫（177手完，黒中押し勝ち），66～81。

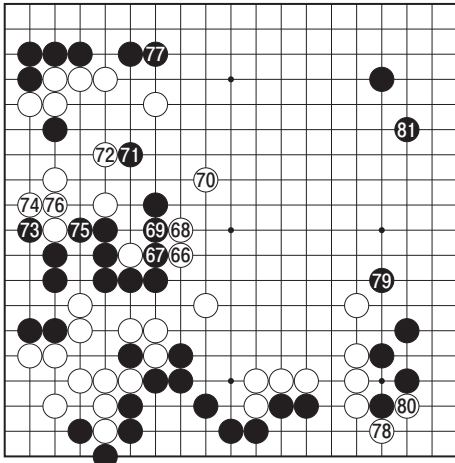
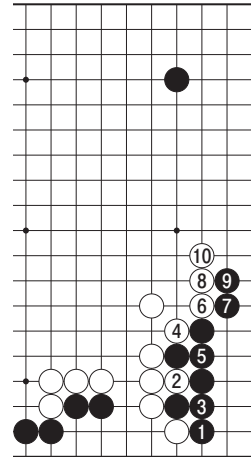


図7 図6の白78の注文（黒を隅に抑え込み、外に厚い勢力を築く狙い）。



出処 = 「第3回日中スーパー囲碁最終戦 / 加藤名人，鉄の**ゴールキーパー** 聶九段を抜けず！ / どうした日本，ついに悪夢の3連敗」（解説 = 山城宏九段，ルボ = 相場一宏），『囲碁クラブ』（日本棋院）1988年5月号16～17頁所載第2譜（1～54 [39～92，本稿で着手の表記を実際の通し番号に統一）・3図。

囲碁の逃げは万策尽きた際に窮境から脱出する窮余の一策だけでなく，決勝点へ向う途中で先行を保ち相手の追い着き・追い越しを許さぬ余裕の一策でもある。呉清源の自由奔放な棋風と洒脱不羈の気質は「天馬行空」（天馬空を行く）の感が有り，競走馬の脚質・戦法で言えば逃げ・先行・差し・追い込み・自在の5類型を全て熟せる。劣勢下の追い込みも玉碎覚悟の**一か八か**の冒険をせず，強靱な忍耐力で少しずつ差を縮めて行くのが呉流である。

林海峰は師の薫陶で凄まじい集中力と明快な形勢判断力を備え，対人・対局の謙抑・隠忍・泰然自若は若い頃から，**中国大陸**出身者らしい大人の風格の現れとして日本で驚嘆された。茫洋な人柄や大金を失っても元々無かったと考える達観は，**中国**の**豁達な精神風土**や**鷹揚な国民性**にも由来した。東亜「金三角」内の上海→台湾→日本の移住で豊富な複合文化が内面に醸成され，囲碁を嗜む漢字・儒教文化圏の君子の優れた資質が異次元に高められた。

祖籍が台北で神戸に生れ住む華人小説家・歴史著述家陳舜臣（1924～2015）は『儒教三千年』（朝日新聞社，92）で，「1頭の親龍」（日本）と「4頭の**小龍**」（**韓国・台湾・香港・新嘉坡**）の「**儒教圏繁栄論**」に就いて，**儒教の浸透度は日本が韓国に及ばず新嘉坡も浅い**から同日に論じ得ないと述べ，李登輝（1923～2020，88.1.13～00.5.20 台湾総統）が指摘した「**4小龍**」共通の**植民地体験**に即して，近代化成功の鍵の1つとして「**複合文化経験圏繁栄論**」を唱えた。

異言語・文化の受容で複眼の視座や多い情報量・**選択肢**が得られるという陳舜臣説は，福

建に生れ北京で育ち日本で活躍した呉清源の変容・大成の要因を説明できる。彼は碁に専念する余り数十年経っても不完全な日本語を上手くしようとせず、完全な二重言語生活者と比べて自国文化の遺伝子を多く生かしたが、日本留学経験者の父呉毅（1892～1924）が与えた日本の棋譜で猛勉強した結果、幼時から両囲碁強国の混血で重層的な棋風が形成された。

20世紀の両国交流は高部道平四段（1882～1951）の初訪中（09～10）が走り、彼は北京・南京の強豪を数段格下と見做す条件で対局し日本の高水準を見せ付けた。日本棋院設立後に棋正社を結成し（1924.11.16）、同年・33年に七・八段に昇り終いに名人を僭称したが、策士の才覚とは裏腹に戦績は芳しくない。呉清源は彼の実力診断で碁の形が良いが力は弱いとし、逆に力碁を基礎に柔軟な日本流を吸収した自分の中国人であるが故の幸運を覚えた。

中共建国後の初代領袖毛沢東は海外留学の経験が無く外国語も操れなく、専ら漢籍に精通する知識の偏りで治国も狭隘で内向きの弊害が大きい。経済の破綻を辛うじて阻止した初代総理周恩来は、祖籍が紹興と為り、淮安で生れ育ち、天津で就学し、日本・仏蘭西留学を経験し、英語・日本語も出来、幅広い経歴・能力に相応しい国際性に富む。複合文化経験の有無・濃淡は両巨頭の個性・知性の様に、様々な思考・行動様式に影響を及ぼす。

「文革」中の囲碁国手「種子」7人の北京配属は南方人に異文化を持たせる妙手とも言え、陳祖徳が上海棋士に多い堅実型の棋風と違って「力戦の雄」で知られるのは、古譜への心酔の他に北の「碁都」北京の風土に染まった事も背景に有ろう。東北・華北に生きて来た聶衛平が北方に多い力戦型でない事は、複数の高手に師事し秀栄や彼に傾倒する藤沢秀行（1925～2009、63年九段）に私淑した影響、黒龍江の広漠たる平原で広がった視野にも由ろう。

上海は鴉片戦争後の外国租界の設立等で内外文化の複合が長く、福建は異郷の移民で国内有数の多重言語複合広域である。同じ東亜「金三角」内の似た特徴が有る広東・浙江も囲碁が盛んで、逆に広東に近い海南や東北・河北・山西と接する内蒙古は未発達で、2014年に漸く入段者が出た（共に17歳の陳必森〔海口出身、黎族〕・張家堯〔巴彥淖爾市〔北緯43°21′・東経107°33′〕出身〕が、「4小龍」中の囲碁後進地域と儒教・漢字文化影響薄の相関と合致する。

日本と「4小龍」は外国に全土を占領された事が有り、中国は幅員が広く抵抗が激しい為か1度も無い。少数民族に由る全国統治なら清朝が有るが、少数の時代に有った全土支配は中共の大陸制圧後も為されていない。中国は巨象の躯体が猛獣にも呑まれ難い様に大き過ぎて潰れないが、歴史悠久・国土広大だけに多難の運命は被占領体験を持つ日本・「4小龍」以上で、国民党の台湾への敗走も大難を前に素早く遁走する習性に駆られた事である。

中国人の国民性に有る危険性回避の意識の高さの典型例として、国共内戦の時に複数の子女を其々両陣営に帰属させ、どちらに転んでも勝ち馬に乗る機会を確実に得る「先物投資」が有る。1本の樹に寄り掛って其処で首を吊って死ぬ破目は結局、毛沢東時代の「反革命分子鎮圧」「反右派闘争」「文革」の粛清と数千万人の迫害死に由って、東南の洋上の

孤島に逃げ込んだのが正解だという歴史の判定に至った。

碁界にとって台湾の自治と林海峰一家の移住は幸運な事と言え、もし台湾も中共に吞まれたり林が中共の治下に身を置いたりしたなら、同世代の陳祖徳の様に日本修行も出来ず「文革」で黄金期を空費させられたに違い無い。大陸の国家集訓隊解散の4年後に7粒の「種子」の待機が認められたが、真面な時代・環境に恵まれない彼等は束に為っても林に比肩できず、「文革」の前年・3年目の林の名人・本因坊奪取は日本・世界の碁史を変えた。

林海峰の名人初就位の前・後年に全国個人戦で連覇した陳祖徳は、日中戦争の終盤に2歳年長の林と同じ日本占領下の上海で生れ、祖籍の浙江鎮海県(現寧波市鎮海区、北緯30°・東経121°37')も林の寧波の近く(18^{キロ})に在る。同じ至近距離に位置する范西屏・施襄夏の故郷寧海と呉清源の祖籍桐郷は、杭州湾を挟んで東南の鎮海と110^{キロ}余り離れているが、陳は浙江人の両「棋聖」と同じ浙江縁の「大国手」に至高の畏敬を抱いて来た。

陳祖徳は30歳時に8年ぶり開催の全国個人戦で3連覇を果たした後、「文革」の荒廃で黄金期が過ぎた様に無冠へと転じた。儒教の始祖孔子(前551~479)の「三十而立」(30にして立つ)とは逆の「30にして絶つ」悲運で、翌年以降の聶衛平連覇の4大会で3位→未入賞(6強以下)→準優勝→4位に終わった。1979年の第1回世界非專業選手権戦決勝でも聶の国際戦初優勝を許し、80年全国個人戦の最中に吐血で倒れ4位が最後の公式戦良績と為った。

初代棋聖藤沢秀行は酒精依存症の禁断症状に苦しんで克服しつつ6連覇(1977~82)を遂げたが、趙治勲に奪われた直後に胃癌が発覚し切除手術を受け、その後も悪性リンパ腫の放射線治療と前立腺癌の投薬治療で3度の闘病を乗り越えた。1991・92年の王座奪回(67~69年3期連続以来)・連覇で史上最高齢(67歳)の選手権防衛記録を更新したが、80年に胃癌手術を受けた陳は再盛期を迎え得ず昨今で言う「不活躍選手」と化した。

陳祖徳は民国の国父孫文(1866~1925)等の著名人が末期治療を受けた北京協和医院で、胃の2/3を切られた上で不良品輸血の事故で急性肝炎が併発し二重の打撃に見舞われた。危篤から脱した後の長期静養で自叙伝的な記録文学『超越自我』(自我を超越して)を執筆し、刊行(人民文学出版社、1986)と中央人民広播電台(国家無線放送局)の全書連続放送に由って、英雄的な奮闘精神で無数の人々を感動させ、囲碁の魅力や棋士の特性の宣伝にも為った。

病を抱えて著した『当湖十局細解』(中華書局、1987)は范西屏・施襄夏の激闘を分析し、中国棋院院長定年退職(2003)の翌々年に出た増訂版は古譜伝承の熱意を改めて示した。2011~12年の膀胱癌発覚・再発・肝臓への移転で帰らぬ人と為ったが、主要著者を為す『中国囲碁古譜精解大系』(中信出版社、4輯・14冊、2011~12)は、68年の生涯の正味2割に当る現役棋士時代の打碁・『超越自我』と共に歴史に遺り、胡耀宇等の現代高手に影響を与えた。

陳祖徳の最も誇らしい戦績は日本の九段に対する中国初の勝利(1963.9.27)で、「零の突破」を記念する切手「囲碁」(郵電部[郵政省]発行、93.4.30)の2枚組の内、「古人対弈図」(古人の

弈碁の図)に続く「中国流布局」(「中国流」布石)は、安永一(1901~94, 日本棋院四段[昇進年未詳]を経てアマチュアに転身, 74年に初代非專業7段)が唱え、陳が65年の対日交流戦で盛んに使った事で日本へ逆輸出されたが、陳は20年後の**中国囲碁勃興元年を導いた元勳**と言える。

陳祖徳の生涯最大の恥辱は1962年大会で王幼宸に負け3位に落ちた事で、前夜に彼と上海隊に勝ちを譲ると申し出た師匠格の王を信用していい加減に打ち、途中から気付いた相手の真剣勝負に抗し切れずその勝利と準優勝を許して了った。僥倖を期待する自分の卑劣・**あわれ**を恥じて泣いた悔恨は、**集団の為の八百長**が有った時代の悲劇である。趙之華は前回大会で**棄権**を以て指令を拒んだ為、同調した弟之雲は上海碁界で居辛くなり福建に移った。

陳祖徳の元妻(1973年結婚, 89年離婚)鄭敏之(1945~ , 広東中山市出身)は同じ上海在勤の、卓球複試合世界優勝2回・単試合準優勝1回の国手である。上海隊の後輩何智麗(1964~ , 上海出身)は87年世界選手権(インド・ニューデリー)の準優勝で、「隊友」管建華(1962~ , 山西陽泉市出身)に勝たせるという**上層部の指令**に背き、**出来競走**を信じて心の準備が無い相手を下し最後に優勝したが、**世界1位**にも関わらず翌年の漢城五輪の中国代表から漏れた。

彼女は1989年に日本人と結婚(11年後離婚)・来日, 92年に帰化・「小山ちれい」と改名, 94年**アジア**競技大会(広島)で世界1位の鄧麗萍(1973~ , 河南鄭州出身)を破って優勝した。「**漢奸**」(売国賊)の**中傷**も一部出たが, 1971年世界選手権(名古屋)男子単3回戦で**郝恩廷**(1946~2019, 河北唐山出身)が朴信一(19??~)に譲らず, 大会後に北朝鮮に出向いて国父金日成(1912~94)に謝罪させられた事こそ、「**民族自尊心**」を**蔑ろ**にした汚辱である。

『**超越自我**』の**八百長未遂の告白と対を為す懺悔**は、高川格(1915~86, 二十二世本因坊[52~61年9連覇, 雅号「秀格」])著『秀格烏鷲うろばなし』(日本棋院, 82)に有る。二段時の日本棋院1934年春季大手合(昇段戦)で藤村芳村四段(1897~1970, 64年六段)の哀願に応じて、6連敗で陥落・休場の危機に晒された彼を助ける八百長に協力した。「黒い1局」の**勇氣**有る**自己暴露**で興味深いのは、気楽な相手に対し1目負けの碁を作る自分の大変さである。

碁史上有名な八百長は田村保寿(1874~1940, 後の秀哉[08年二十一世本因坊襲位, 11年八段, 14年名人[九段]推挙])の七段昇進(05)時の事で、彼は**人気・商売に障らぬ**よう弟弟子雁金準一五段(1879~1959, 33年棋正社[24年結成]八段, 59年瓊韻社[41年設立]九段推挙・日本棋院名誉九段追贈)に泣訴し、必敗の局を持碁(引き分け)にして貰った。雁金の終盤の拙い作り方で師匠秀栄に見破られ、**日本棋院創設者の汚点**として後世に遺った。

新世紀初頭の2001年4月9日に中国囲碁乙級聯賽で「**假(虚偽)碁**」(八百長)**醜聞**が現れ、江蘇隊の劉曦(1988~ , 同省南通市[北緯31°59'・東経120°54']出身, 同年二段, 14年五段)が丁波(1971~ , 同省泰州市[32°29'・119°54']出身, 92年五段)教練の指示に従って、浙江新湖隊の朱松力五段(1977~ , 同省寧波出身, 翌年六段)にわざと負けた。香港隊の抗議で**前代未聞の不幸事**は**社会の糾弾**を浴び、中国囲碁協会は緊急に関係者の**厳罰**に踏み切った。

丁波と浙江隊の陳臨新は次年度の全国団体戦・甲級聯賽の教練/選手の資格を剥奪され、九段が八百長に関与し処分される事は世界でも類が無く当人・同省・中国の恥である。序列 51 位の朱松力は前年入段した相手に負けそうにないから下手が譲るのは理解に苦しむが、江蘇・浙江が北京・上海と共に国際学力到達度調査の中国優勝の「追い風参考記録」(池上彰 [1950～, ジャーナリスト, 報道人] の評) と結び付ければ、碁史に可く見られる栄辱の表裏一体を感じる。

陳祖徳が殊に名誉に感じたのは長年の夢である対吳清源局 (1973.5.15) で、この機会に恵まれる中国棋士は後に居ないから幸運に感激した。呉は全盛期を過ぎたものの碁史上の最高の才能を持つ巨匠、21 世紀の碁界の最も偉大な巨星、囲碁芸術に一番貢献した大家だと讃えた。大勢の優れた棋士に「最も崇拜する棋士は誰か」と訊いたら殆ど吳清源だと答える、という『陳祖徳囲碁名局集』(日本語, 三一書房, 1994) の記述も当時の中国の実情である。

坂田栄男は八段時代の対吳清源六番碁 (1953.5.27~9.2) を振り返って、一段上の相手を昭和囲碁史上に燦然として輝く巨星と礼賛し、「天才」とはこの人が独占すべき言葉であろうと極言した。若き日の彼は我々の憧れ・目標と為り、神格化されていた程で、あの神韻縹渺たる風貌から漂う雰囲気は筆舌に表現できない物が有った、と「番碁の雄」への讃辞を惜しまなかったが、1960 年代の覇者の絶賛から呉の別格の卓越は分る。

1963 年訪中交流戦の後に中国で指導を行った宮本直毅 (1934~2012, 69 年関西棋院九段) は、吳清源に打って貰う為に 50 年に棋士と成り 64 年の機会到来に興奮した。陳祖徳も同じ「力戦の雄」として意識した大平修三 (1930~98, 63 年九段) も、不調に陥った呉との対局 (64 年名人戦総当り) の解説で「雲の上の人」との再戦に感激し、往年の神才の片鱗を窺い得たこの 1 局も、8 年前の六段時代の初手合と同じ忘れ得ぬ 1 局である、と印象・収穫を記した。

凄い撲殺力で異称「金槌」の大平は序盤から躍動する呉一流の足の速さに敬服し、左上隅の白 12 の断点を粘がらず下辺に開く黒 11, 白 14 の伸びで黒 7 が封じられるのを構わず上辺に開く黒 13 は、到底真似の出来ない速さだと評した。黒 27 の外し (相手の鋭鋒を齧し思惑を外す様に軽妙な打ち方) は、白の軽い利かしを逆手に取った見事な打ち回しで、思いも着かぬ強手に度肝を抜かれ、この 1 手を教わっただけでも本局は価値が有ると言う。(図 8・9)

日本棋院では本因坊・名人 (唯一の九段) 世襲制廃止の 10 年後、大手合に由る昇段制度の下で九段 (藤沢庫之助) が誕生し (1949.6.15), 翌年 2 月 15 日に吳清源 (特別客員棋士) が九段に推挙され、55 年に坂田栄男が成就した。呉と共に「新布石革命」を起し同じ 1942 年に八段と成った木谷實は 56 年に昇り、第 1 号誕生の 10 年後に漸く杉内雅男 (1920~2017) が届いたので、その頃の最高段位に辿り着くのは至難の業であった。

宮下秀洋 (1913~76) は「牛蒡抜き昇段」(48・49・53 年六~八段) 後 60 年に九段に進み、高川格 (54 年八段) も本因坊 9 連覇達成の同年に宿願を果たした。六段時の 1941 年に初代実力制本因坊 (本因坊戦優勝) に就いた関山利一 (1909~70, 同 51) は、58 年に関西棋院で九段

図8 第4期名人戦挑戦者決定総当り戦, 呉清源(黒, 込5目半) vs. 大平修三(282手完, 白21目勝ち), 1~27.

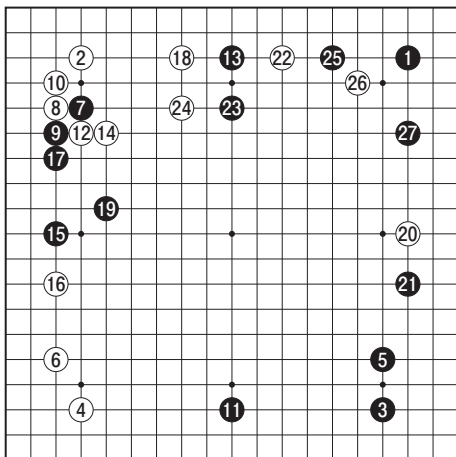
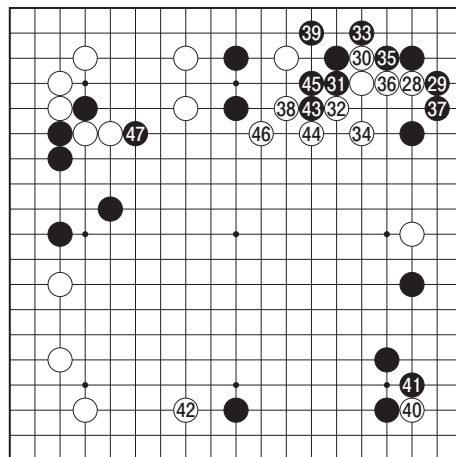


図9 前図に続く28~47.



『現代囲碁大系』第30巻『大平修三』(大平修三解説, 頼尊清隆執筆, 講談社, 1983年)63~67頁所載第8局第1~5譜(1~64)に拠り作成。

に推挙され, 第2・5~6期の橋本宇太郎(同46)は54年に自身主宰の同棋院の九段に昇り, 3~4期の岩本薫(1902~99, 雅号「薫和」)は67年に日本棋院で遂げた。

一方が4つ勝ち越すと手合割(技量差を埋める為の対局条件)を直す打込十番碁で, 呉清源は頂上陣を悉く打ち込み「十番碁の雄」の美名を得た。対7人・10回の内唯一の負け越し(4-6)は, 八段時の対藤沢庫之助六→七段(1942.12.27~44.9[日不明])である。定先(一方が常に込[先番が有利な為]に課せられる数目的負担条件)無し^{ハンディキャップ}の先番[黒]で打つ手合割の後者は先番が天下無敵の強さを発揮して, 第8局以降の3連勝で格上^{スター}の大明星を倒し大金星^{ほし}を上げた。

史上初の両九段が相見える第2次十番碁(1951.10.1~52.7.4)は「世紀の対決」と喧伝され, 互先^{たがい}(対等の対局条件)で先番無敵の両者は第1~5局で1度も順当な黒番勝ちを得ず, 次の3局で呉は一気呵成に連勝し相手を先相先(3局の内1回先番で打ち, 後に2回は互先で打つ手合割)に打ち込んだ。激情家の藤沢は惨敗のどん底で打ち込まれた方の再挑戦権を行使したが, 主催紙・棋院の反対を押し切って強行した第3次(1952.10.9~53.3.13)も1勝5敗に終わった。

二段差の定先まで打ち下げられた藤沢は不成績の責任を取って棋院を離脱し, 橋本宇太郎との十番碁(1954.8.19~55.1.19)も1-5で先相先に打ち込まれ, 無所属で参加する本因坊戦の挑戦(57.6.29~8.27)も高川秀格に2-4で退けられた。1957年「朋齋」と改名し翌年に王座戦で優勝し59年に棋院に復帰しが, 「両雄不並立」(両雄並び立たず)の通り呉清源の後塵を押し続け, 同時代の後進九段坂田栄男・木谷實・藤沢秀行(叔父[おじ] [6歳年下])にも劣る。

呉清源の打込十番碁の嚆矢は七段時の対木谷實七段 (1939.9.28~41.6.6) で、**新布石革命の両旗手**は第6局まで高下が分れて、後者は1-5で一段差の先相先に打ち下ろされ、元に戻す挽回の機会も無い儘に技量差の判定が固定した。次の対雁金準一は5局 (1941.8.7~42.5.4) で4-1と為り、**老大家の降格を避ける**当く中止し、更に藤沢朋斎と闘う第1次を経て、対橋本宇太郎八段 (1946.8.26~47.12) は第8局まで6-2で先相先に打ち下げた。

岩本薫和は対呉十番碁 (1948.7.7~49.2.24) 第6局で4番負け越し・手合割直しと為り、同じ本因坊・八段の橋本宇太郎は第2次 (50.7.25~51.8.9) の3勝5敗2持碁で先相先を保ち、次の藤沢庫之助の第2・3回の互先→先相先→定先の二段降格を免れた。坂田栄男は先相先の六番碁の負け越し (1-5-1) の直後、十番碁 (同11.4~54.6.25) の2-6で定先に下ろされ、高川秀格本因坊も**声価を死守する苦闘** (55.7.19~56.11.27) の同じ8局目で先相先に落ちた。

藤沢九段が呉九段に一・二段下に打ち込まれた事は、実力は八・七段に過ぎないと宣言されるに等しい。**残酷極まり無い打込制**は応戦者が出ない事も有って消滅し、趙治勲対「新撰組」山城宏・小林覚 (1957~ , 87年九段)・王立誠「必殺打込勝負」(『囲碁クラブ』主催, 84) の様な企画も今や無い。高川格は山部俊郎 (1925~2003, 63年九段) に**呉は自分より3目(三分)強い**と言ったが、**熱血の藤沢も冷静な高川も越えられぬ呉の絶壁の前で非力**を感じた。

呉清源は対高段者総当り十番碁 (1949.7.27~50.2.2) で、長谷川章七段 (1900~87, 65年引退・名誉八段)・梶原武雄六段 (1923~2009, 65年九段)・窪内秀知六段 (1920~2020, 60年関西棋院九段)・高川格七段・細川千仞七段・宮下秀洋六段・林有太郎七段 (1900~83, 69年九段)・前田陳爾七段 (1907~75, 63年九段)・炭野武司六段 (1921~86, 58年「恒廣」と改名, 日本棋院関西総本部所属, 63年八段, 追贈九段)・坂田栄男七段の**順番波状攻撃を驚異的な8-1-1で凌いだ**。

次の呉対七・八段戦 (1950.4~51.7) でも、加藤信八段 (1891~1952)・林有太郎・前田陳爾・坂田栄男・光原伊太郎七段 (1897~79, 61年名誉八段)・宮下秀洋・細井千仞・長谷川章・岩本薫・高川格・篠原正美七段 (1904~82, 72年九段)・島村利博七段 (1912~91, 後に「俊宏」「俊広」「俊廣」と改名, 日本棋院中部総本部所属, 60年九段)・瀬越憲作の13人が、**入れ替り立ち代りに打倒呉清源に挑んだが、宮下・岩本・高川の3猛者しか勝てなかった**。

高段者総当り十番碁は特定相手との打込十番碁に勝るとも劣らぬ厳酷さが有り、呉清源の圧勝は最早八段でない実力の証明と為り13日後の九段推挙に直結した。対七・八段戦の時は既に**試金石で「含金量」を測る必要は無く**、寧ろ同時期の呉・橋本第2次等の打込十番碁と共に、来日前・後の試験碁の相手の岩本薫・橋本宇太郎・篠原正美・前田陳爾 (当時六・四・四・四段)、乃至師匠の瀬越憲作との**実力の完全逆転**を改めて印象付けた。

呉清源は1926年8月に北京で岩本薫・小杉丁四段 (1898~1976, 36年五段, 64年引退六段) の指導碁に勝ち越し、1年後の対井上孝平五段 (1876~1941, 35年六段) でも優位に立ち、大正 (1912.7.30~26.12.26) 終焉の前後の出会いは「昭和の碁聖」の**受胎**と為った。碁界長老の

瀬越憲作は呉少年の棋譜を見て秀策（1829～62、48年第十四世本因坊跡目・六段）の再来と感じ、その来日の準備として一番弟子の橋本宇太郎を派遣して試験碁を実施した（1928.9.4～5）。

橋本は『囲碁専業五十年』（至誠堂、1972）で師命を帯びた対局の負けを悔み、浮付いた遊山気分さんで全力を挙げなかった事は棋士人生の最大級の悔いとした。日本選手権手合の決勝（1933.8.30）で同じ新五段の呉に敗れたのも大変な痛恨事で、不利な白番で3連勝した後に本局で先番を引き当てた時の気の緩みが重い教訓と為ったが、その瞬間の「天運は我に在り」の喜びに因んで言えば、優勝者の秀哉と打つ特典は天意に由って呉に与えられた。

『現代囲碁大系』（編集主幹＝林裕、全47巻＋別巻1、講談社、1980～84）第6巻『橋本宇太郎上』（本人解説、志智嘉九郎執筆、80）所収の第18局「珠玉篇」（本因坊・呉八段三番碁第2局、43.12）は、持碁ながら60年来の約1600局中人に見て貰える唯一の会心譜とされるが、「敗因は得意の時に在り」の通り勝勢を嬉しがり白188で折角の名局に汚点を残した、と後悔の臍を噛んで第11～12譜（201～277）で着手の解説を止め、盤外の勝者の内面に光を当てた。

呉清源は少年時代から信仰を求める傾向が強く、彼や家族は日本留学の当否を決める際、中国、殊に北方に多い民間信仰の中の扶乩（神の意志を知る占い）で神意を伺った；21歳時（1935）神の啓示で手合を止めて天津に行き、世界紅卍会（済南に本拠を持つ中国最大の宗教結社）に入り、爾来その宗教遍歴は続き、儒教・仏教・道教の經典や中国・日本の学識者の著書を読み、真理や道を探求した、と橋本宇太郎は弟弟子の宗教的な心情・信条を解説した。

第20局「神と人との間」（呉・橋本第1次十番碁第2局、1946.8.29）の解説は、呉が44年に新興宗教の靈字教に帰依し暮れに碁界から引退し、46年8月に神（教祖）の指示で棋戦に戻った経緯を振り返る。呉は「近き将来、中国に戻り、中国棋士と糾合し、碁なる東洋固有の精神技術をもって、両民族の親和促進に尽したい」と決意したが、復帰の第1局（8.26）では調子を忘れたのか神足が見られず、快勝した橋本がその異様な不調を心配した程である。

第2局では橋本は黒123から変調し、前田陳爾と東西の詰碁（一部分の死活を研究する創作課題）の大家を為すのに、取れる白の石を取らずに調子良く活かしてしまいい、相手を窮地に追い詰める好機を再三逸して1目負けた。瀬越師が「破門物だ」と嘆く不可解な展開は、橋本が打とうとすると耳底に太鼓の音が響いて集中できない等の怪談を生み、呉の神憑りの強さは神助を得た靈力として伝説化し、劇的に復活した最盛期は更に10年余り続いた。

第23局「負けた名局」（本因坊・呉三番碁第1局、1950.7.13～14）の記述に拠ると、橋本夫人は棋士に成る修行をした人で夫君の碁に就いて一切言わないが、今回2連敗後せめて勝たせたい一心で、翌日の朝刊で又負けた事を知ってその儘失神した。試験碁・日本選手権試合・十番碁で3度も呉清源の出世・成功に貢献した末、高川格と同じく三番碁でも歯が立たない橋本宇太郎は、天の命を帯びて不世出の天才の伴走役を要所要所で務めた様に映る。

中山典之（1932～2010、92年六段）は『実録囲碁講談』（日本経済新聞社、75）所収「名將の

揚げ言」で、第2期十段戦(63)五番勝負第2局の記録係を務める時、小説家川端康成(1899～1972)が観戦に来た場面を描く。彼の愛棋家は秀哉本因坊引退碁(対木谷實七段、1938.6.26～12.4、16回打ち継ぎ、5目負け)の観戦記(『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』連載)、同じ題材の実録小説『名人』(長篇、42～54、完成版は『呉清源棋談・名人』、文藝春秋新社、54)に情熱を注いだ。

盤面を睨む橋本宇太郎十段が気付くと座布団を滑り下りて丁重な挨拶に及び、川端康成も慇懃に返礼し邪魔に為らないよう退室した。藤木人見立会人(1917～97、63・71年関西棋院七・八段)は観戦者への好感から色々質問し、中山三段は橋本の黙認で川端の事を紹介した。藤木が感に堪えて知名度を訊いた時に七段の先輩に失礼と思いつつ、碁で言えば九段でしょうと気軽に答えたが、橋本は強い語気で「九段ではありません！名人です！」と訂正した。

挑戦者半田道玄(1915～74、59年九段)は同じ関西棋院の仲間なので余所見・雑談が出来たが、橋本宇太郎は初戦を落し最後に1-3で相手に60年の王座以来の選手権を差し上げたから、記録席の私語が厳禁される棋戦での作家談義は彼の恬淡と遊び心が助長した物である。中山典之と彼が頂上級と第一人者を形容した九段と名人は此処でも重みを現し、後者は5年後(1968)川端の日本人初のノーベル文学賞受賞で妥当性が証明された。

橋本宇太郎は四段時の1928年に瀬越憲作師の命を携えて北京を訪れ、7歳年下の呉清源(14)の入門試験碁の相手を務め、痛恨の2連敗で千載一遇の神童の来日の承認に直結した。才気煥発・闘志横溢の「天才/火の玉宇太郎」は力強い「華麗自在流」で名高いが、飛付三段で出世した弟弟子に十番碁(1946.8.26～47.12、50.7.25～51.8.9)等で痛め付けられ、生涯に亘って彼の天賦の才能と神格性の有る強さに尊敬の念を持ち続けた。

呉清源が全九段+高川格本因坊が出る第1期日本最強決定戦(1957～58)で優勝した後、橋本宇太郎は呉を名人に推し次期から挑戦者合制にすると提案したが実現しなかった。第2期(1958～59)の坂田栄男優勝と第3期(59～60)の両者同率優勝に由って、61年の名人戦発足の際に呉を予め名人とし挑戦者決定総当り優勝者が挑む方式は消え、呉は輪禍(61.8.16)の影響で13人の総当り戦で神通力を発揮し切れず藤沢秀行に持って行かれた。

瀬越憲作は呉清源が幾度の十番碁で時の最強陣を順番で順当に撫で斬りしていた時代に、呉は本因坊道策・秀策に次いで第3の碁聖と称される資格を有するが、それも今の内で、歳を取って碁が打てなくなると評価も変る、と意味深い発言をした。それに同感する橋本宇太郎は非日本棋院所属や中国籍も関係した名人の未達に遺恨を抱き、日本の碁打ちは呉が歳を取って打てなくなるのを待って名人戦を始めたと言われても仕方が無い、と悔やんだ。

度量が狭い冷遇云々は反骨精神が強く齒に衣着せぬ彼の義憤の逆りであろうが、実際には日本の碁界や各界の関係者は破格の礼遇を与えた。瀬越憲作は彼を受け入れる為に政財界の有力者に働き掛ける時、そんな大天才が来たら日本の碁打ちは皆負かされて了うぞと嘲揶われたが、それは寧ろ望む所で、そうなれば日本の碁打ちも打倒呉清源で立ち上がる

から、日本の碁は愈々盛んに為るに違ひ無い、と磊落な胸襟で堂々と主張した。

秀哉は1928年10月23日に東京駅まで呉清源を出迎え、直後の5棋士対呉「日支碁戦」の冒頭に出場し渡来の神童を宣揚した。呉五段は日本選手権手合の決勝で主催者『讀賣新聞』の期待通り橋本宇太郎五段を下し、特典として秀哉の最後の名人勝負碁の相手を務めた際に、中国人への社会的な偏見や本因坊門下の高足等の敵意が有ったものの、絶対權威の老大家に対する大善戦（2目負け）で満天下の困碁人を魅了した。

呉清源の「新布石革命」と同月に始まった対戦（1933.10.16～34.1.29, 14回打ち継ぎ）の劈頭に、黒1が三三（碁盤の端から見て第3線と第3線の交点）、黒3が反対側の隅の星（碁盤の目の上に印した9つの黒点、隅の場合は第4線同士の交点）、黒5が天元（碁盤の真ん中に在る星）と、三三が「鬼門」の禁じ手と為る坊門の規矩を意識せず斜め一直線の怪異な布陣（図10）を敢行し、奇を銜う様な破天荒の起手が世間の関心を引き『讀賣新聞』部数3倍増に寄与した。

中山典之は『昭和囲碁風雲録』（上・下2巻、岩波書店、2003）第8章「史上第一の有名局——本因坊秀哉対呉清源」で、困碁史始まって以来4千年、見た事も無い新機軸として件の3手を称えた。『囲碁天地』誌の意見調査「36問」（2010年第1期「号」～14年第12期）でも、中・台・韓・日の棋士・非專業強豪101人の内9人（本項目で特定対局を挙げた60人中2位）が、呉対秀哉「三々・星・天元」局を古今の対局中の最も印象深い1局に選んだ。

呉清源逝去1周年の2015年11月30日、台北の海峰棋院（1997年海峰囲碁基金会として創設、

図10 名人勝負碁，呉清源（二先二・先番）vs. 秀哉（252手、白2目勝ち）、1～21。

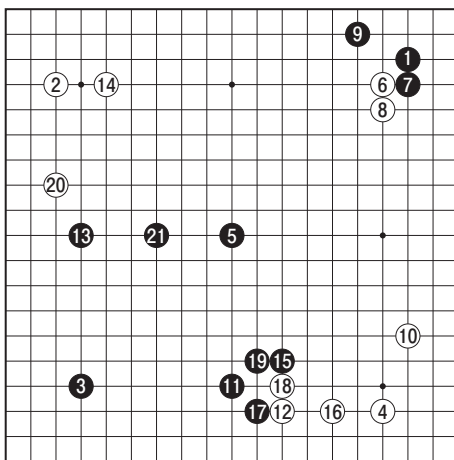
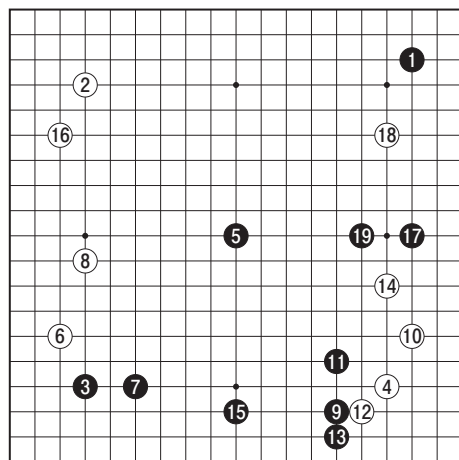


図11 第8回棋王戦挑戦手合七番勝負第4局，周俊勳（黒、込6目半）vs. 王元均（163手完、黒中押し勝ち）、1～19。



呉清源『増補・新装呉清源打碁全集』第1巻（平凡社、1997年）454頁所載第1譜（1～50）に拠り作成。『囲碁天地』2016年第3・4期112～113頁所載本局第1～2譜（1～19）に拠り作成。

08年改称)で第8回棋王戦挑戦手合七番勝負第4局が行われ、1-2の劣勢に立つ挑戦者周俊勲は呉への敬意を込めて三三・星・天元の布石を再演した。前年の十段位奪取で彼を無冠に落した王元均七段は黒5を見て信じ難い表情に為ったが、周も**実利の損**を顧慮して大勝負で試したい願望を長らく封印し、**勝負への執着を捨てた**今回に初めて実行した。(図11)

周俊勲は^{アマ}非專業初段と為った幼い頃から周りの^{せん}推薦で呉清源全集の打碁を何回も並べ、最も尊敬する棋士の呉の様に80・90代に為っても碁の研鑽を止めないと誓った。彼は低段時の1996年に応氏杯で初めて呉と会った時にその優しさに感動し、^{スーパーアイドル}超級偶像の^{スター}明星歌手を追い掛ける^{ファン}熱狂的な崇拝者の気持であった。あの奔放な布石で賭けたい念願は^{うぶ}初心な思いで初心に返った訳で、^{もつ}得失を度外視した結果1勝を上げ最終局まで纏れ込んで又勝った。

(夏 剛, 立命館大学国際関係学部教授)

(夏 冰, 京都囲碁道場師範)

围棋之源——天授的智斗游戏（三）

本系列论文旨在探求围棋的起源及本源性特征，本部分首先着眼于当代中国历史上堪称“发生于纬度轴，展开于经度轴”的现象，以及围棋、学力等多种领域内精英往往集中于若干地区的人才分布规律。

上回参照“黑河—腾冲线”画出直线连接东京—首尔—新加坡的东亚顶级富强“金三角”，亦即围棋列强国家、地区集中的天授“世界围棋兴盛特区”。本部分进而套用“表日本”、“里日本”的气候、经济发达度区分，指出基隆—高雄线以西、东两侧可分别称为“表台湾”、“里台湾”，将西部沿海地区多出高段棋手及不乏活跃于日本棋坛者，视作与中国大陆东南沿海地区相通并联通“金三角”内日本的“文化缘”。

从日本、“四小龙”高速发展的“儒教圈繁荣”、“复合文化经验圈繁荣”论，引申出生在福建、长在北京、籍在日本、根在台湾的吴清源之为围棋史上最杰出者的典型事例，由此寻求 20 世纪围棋呈鼎盛之势的要因，并证实其足迹所留之处皆为古今围棋发祥、勃兴之邦。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）

（夏 冰，京都围棋道场教师）